よそ事でない大災害

八幡浜市中学生対象防災講演

八幡浜市が十八日午後一時四十五分から市文化会館サブホールで防災講演会を開催した。中学生に東日本大震災の被災地の取り組みを知ってもらい防災意識を高めてもらおうと保内中学校生徒対象に開催。一、二年生約百三十人が参加した。十九日には八代中、愛宕中でも開催した。

講師は岩手県陸前高田市で震災の教訓を後世に残すため、津波到達ラインへの桜の植樹活動を続けているNPO法人桜ライン311の岡本翔馬さん（32）と、その活動をドキュメンタリー映画「あの町に桜が咲けば」にした監督の小川光一さん（27）。二人は二〇一一（平成二十三）年三月十一日の大震災発災後、陸前高田市で被災者支援活動を行う中で知り合った。

桜ライン311は発災した年の十一月に任意団体として発足。翌年の秋に特定非営利活動法人化、昨年五月に認定特定非営利活動法人に認定された。

陸前高田市の津波到達ラインは延長約170㎞。同NPOは後世の人たちに「大地震で津波が起きた際は桜並木より高い場所まで逃げて」（岡本さん）との思いを込め、発災した年の秋から桜を植樹している。現在までに同市内百八十八か所に計七百六十七本の桜の苗木を植樹。植樹場所は地権者から提供を受けるなどした。国内外から寄付や苗木の寄贈も寄せられている。毎年春と秋の二回行っている植樹会には全国のボランティアや地元の中高生、大学生などが参加。二〇一一年秋の第一回から二〇一四年秋の第七回までに延べ二千百三十六人が参加した。

講演会ではドキュメンタリー映画を上映した後、二人がそれぞれの思いなどを語った。

小川さんは「私はもともとウガンダでのホームスクール運営やカンボジアでのエイズ患者支援など海外で活動をしていた。四年前に東日本大震災が発生した時、海外での活動経験を被災地支援に活かしたいと考え、陸前高田市へ入った。同市を選んだのは仲の良い友人のご両親が住まわれていたからだ。映画では桜ライン311の活動や陸前高田市のことを紹介するだけでなく観て下さる人たちに伝えたいメッセージを込めた。同じ過ちを繰り返さないために、映画からのメッセージを少しでも受け止め、自分の住むまちで津波など大災害が起きたらどうするか、家族や大切な人たちをどうやって守るかを考えてほしい。八幡浜市も海が近い。大きな地震、津波が起きれば、まちは跡形もなくなる。私たちは一年前から全国で講演を行っている。これまでに三十都府県で百二十五回の上映会と講演を行った。どこの会場でも、私たちのまちでは大災害は起こらないから大丈夫という人たちがいる。しかし、日本は世界第四位の多雨国で年間平均降水量は1714ミリで世界平均の973ミリを上回る。土砂災害危険箇所は全国で52万5307箇所、都道府県別の第一位は広島県で3万1987箇所だ。災害が少ないと言われる県はある。福島県もその一つだった。災害について周囲がこのまちは大丈夫だと言っていても、疑って本当なのか調べることが大切。全国で災害が起き、人が亡くなっているのは事実。でも私たちは心のどこかで自分だけは災害に巻き込まれることはないと思いながら生きている。私は被災地から東京に戻っている短い間、都内で街頭インタビューを続けている。『大地震が起きると言われながら起きていないから、もう起きないと思います』と答える若い女性や『もう十分に生きた。災害が起きたら起きたで仕方ない』と話す高齢者もいた。陸前高田市では三百人以上の知友人を地震や津波で亡くした人がいる。自分や自分のまちは大丈夫と思わず、災害が起きた時にどうするか、普段から考えてほしい」と語った。

岡本さんは「私は東日本大震災の発災時、東京の建築関係の会社で働いていた。発災から四日後に陸前高田市の実家に帰った。実家は全壊していた。瓦礫と化したふるさとの景色を見ながら、自分に出来ることはないのかと考えた。東京での仕事で自分の代わりはいるだろう。私は会社を辞め、二か月後に故郷で被災者支援の活動を始めた。私は悔しい。過去の災害の教訓が活かされなかったことが悔しい。陸前高田市は過去に何度も津波被害に遭った。ここまで津波が来たことを示す石碑も建っていた。そのことを私は発災後に知った。陸前高田市では約二千人が津波で亡くなった。もし津波到達ラインをみんなが知っていれば、逃げて助かったかもしれない。だから私たちは市内の津波到達ラインに桜を植えていく活動を始めた。地震の後には津波が起きる。桜並木より高い場所に逃げてほしいという思いを言葉だけでなく、形に残す。悲しいことだが、時間とともに震災の記憶は風化していく。だが忘れてはならない教訓がある。その教訓を風化させないことが大切だ。私たちは大災害を経験したことが無い人、経験していても覚えていない人たちに、その教訓を伝えることを目指している」と思いを述べた。

質疑応答では生徒の質問に答え「私たちが植樹している桜の苗木は一本1万円。高さは2m30cmから3m、太さは皆さんの親指一本分から二本分」。

生徒からは「東日本大震災を忘れず、八幡浜でいつ起きるか分からない災害への対策を考えながら生活したいです」二年男子、「津波の到達ラインに桜を植樹するのは良いアイデアだと思いました」同、「生きたくても津波で生きられなかった人の分まで、しっかり生きなければいけないと思いました」一年男子などの感想が出た。

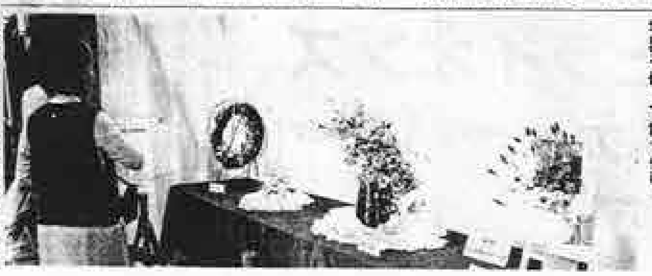
ゆめみかん
粘土フラワー

八幡浜市内でネンドフラワー教室を主宰している宇和島市錦町、石川京子さんが市文化会館ロビーでネンドフラワー愛花展を行っている。十日まで。

ネンドフラワーは専用の粘土で茎や葉、花を造形し、油絵具で着色して仕上げる。

展示はバラやスミレなど季節の花々など、花瓶や花籠など様々な容器を使って飾り付け

ている。
も花びら
再現して
眺めると
ほどの出
ネンド
れること
約結式な
品として
子どもに
いという
色とり
展示して
々しい雰
が足を止
つの作品
る。



きょうの運勢

ね年　欲しい欲しいの念が悪果を招く　煩悩の火は消えぬが今日を忍びて吉

うし年　仁者に敵なしと言う。人を思いやって吉運来る

とら年　靴ひもの切れた朝、思わぬ失策ある故に用心

う年　苦難の末に手に入れた経典は真っ白だった。言葉によらない行いに真実がある教え

たつ年　掃除をすれば紙が清まる以上に心が清まる。清浄にて吉祥

み年　人と生まれての喜びは限りなき道を歩む事なり

うま年　天地の間に万物が育つ。和合こそが最上の平安と知りて吉

ひつじ年　松風は耳に澄みて良き音便あり。されど功を願うは不可なり

さる年　賢者は世に逆らわず順風に帆を上げてゆく

とり年　意見対立し派閥多し。本質を見抜き小異を捨てて大同につけ

いぬ年　朝早く磯を歩き大海を見る。食運に恵まれざれども気分は豊か

い年　友を送りて風雨に遭う。雨具の用意をすべし

吉左衛門の我楽多日記

骨董談義

歴史博物館より、「四国へんろ展」に連れて行ってもらった。

小生夫婦はオズメッセから乗るも、西予市が出発地点だから、バスの席は一番後ろの席しか空いてない。なにか損をしたような気がして、最後部の席に座る。

美術館の中をいろいろ見て回り昼食になった。

最後にバスから降りたので、食堂の席は3席しか空いていない。仕方が無いので、その空いてる席に女房と座った。

すると隣の最後の席に、学芸員の今村さんが座られた。

丁度良い機会だから、前々から気になっていたことを聞いてみた。

今年の春堀江町に行ったら、既に2mもある道路石が置いてあった。その様な物が個人の庭なんかに何故置いて要るのか不思議に思ったので、何故でしょうかと問うと、

道路の拡張とかで道路石を動かす場合があります。元の場所に返す事が出来ない時には別の場所に設置する場合がよくありますとの事。

なるほどその庭には、京都から取り寄せた春日灯籠があり井戸の縁取りを備前焼で飾っているし、庭のインテリアとして道路石を置いたのかも知れませんね。

先祖は素晴らしかったので、江戸時代そのようなご先祖が贈られたのでしょうと云う結論になった。

今度は逆に質問された。趣味は何ですかと聞かれるので、骨董ですと云うと、骨董にもいろいろありますが、ジャンルはどのようなものですかと聞かれるので、

茶道具ですと答えた。

横の女房が、仁清展があると聞くと、仁清の国宝2点が揃うのは初めてだと云って金沢まで行き、曜変天目が出ると聞けば、日本最高の国宝だと云って二子玉川まで行くし、大変なのですという。

今村さんが云われるには、いま伊達博物館に、お茶碗が出ていますが行けばよいですよと。

もう行
答えると
すねと云
あのお
館の黒楽
影」と云
ています。
すばらし
す。あそ
はよいお
すね。何
国宝の
も来てい
えば、よ
すねとの
一度そ
を騰雨で
考えます
それは
ね。
いや〜
がありま
云えば今
ヨトンと

2015年4月9日八幡浜民報